

Mottainai(もったいない)

ケニア出身の女性環境保護活動家でノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイさんは、2005年、京都議定書関連行事出席のため来日した際、日本語の「もったいない」という言葉を知って感銘を受けました。その後、「MOTTAINAI キャンペーン」を展開し、この日本語は世界中に浸透することになりました。2011年9月、マータイさんはお亡くなりになりましたが、環境の3つのワード、ゴミ削減、再利用、再資源化をたった一言で表す事の出来るだけでなく、かけがえの無い地球資源に対する尊敬の念が込められている素晴らしい日本語「もったいない」。

この言葉、日本人としてなにげに使ってますがちょっと考えて見ましょう。戦争をくぐり抜けてきた人々は、ものがない、食べ物が無い、すべてがない。もののありがたさを体で知っているから、「もったいない」は毎日の生活そのものでした。例えば、昔は魚屋や八百屋さんに行くと包み紙は新聞紙を利用していました。その紙は、かまどでご飯を炊く燃料に、残りの灰は畑にまいて肥料に使って、そこからまた野菜をつくっていたわけです。そして現代、時代は超消費社会、「断捨離」という素晴らしい考え方もその本来の意味を履き違え、有効利用出来るものまでドンドンを捨てる社会です。

ためることはなかなか理解されずドンドンものがたまって大変だと言うけれど、安易にものを捨てないで逆にものを積極的に利用して行くことが「もったいない」の原点なのです。日本中で、生活廃棄物をどう処理して行くかは大きな問題です。生活水準が高くなるに従って大量の資源を使用し、一方的に使い捨てをやってきた結果として環境の破壊があるので。大規模な廃棄処理場をつくることも勿論必要ですが、一方で、人間の生活そのものを自然の循環システムに添って変えていかない限り問題は解決しないのではないのでしょうか。

この世界、そして宇宙には一方的なものは無く、すべて循環と絶妙なランスで成り立っています。水は雲から雨となって大地に降り注ぎ、地上で川の流れを作り海に注ぎ、水蒸気とになって再び大気に戻り、雲となる。水はこのようにカタチを変えながら地峡を巡り多くの生命を育んでいるのです。そのうちどこかでひずみが起こると異常気象となり我々の生命を脅かします。それが自然の循環なのです。日本人は太古の昔から自然と共生してきました。それは日本の気象風土に培われた素晴らしい美德でした。「もったいない」は日本人が生まれながらに持つ生活と自然との関わり、自然の循環の原理に適った素晴らしい日本語なのです。

